



棚田ライステラス

全国棚田(千枚田)連絡協議会

第51号 2009.3.25
(年3回発行)

発行/全国棚田(千枚田)連絡協議会

編集/ふるきゃらネットワーク

〒184-8571 東京都小金井市町65-3ふるさときゃらばん内

TEL:042-381-6721 / FAX:042-383-8614

<http://www.yukidaruma.or.jp/tanada/>



●印は現在の施設位置です

徳島県上勝町 <樺原村分間絵図>文化10年(1813)「上勝町所蔵」(本記事への掲載許可済み) 縦103×横151cm

「江戸時代の後半、文化・文政年間(1803~31)頃に、徳島藩では実測にもとづく縮尺2寸1丁(約1800分の1)の村絵図が作成されます。文化10年(1813)に作成された樺原村分間絵図はその実測絵図の一枚で、29軒を数える家屋のほか、観音堂や地蔵堂、山ノ神、道(米筋)などが描かれています。家屋の周囲には薄墨色の畠が広がり、萌葱色で着色された多数の田(棚田)が谷間に傾斜地に階段状に連続して広がっています。このような景観は、今日でも現地で見ることができます。」(「樺原の村の棚田パンフレット」(徳島大学 平井松午氏作成)から抜粋)



“棚田”への思い

九州国立博物館 館長 三輪嘉六

Message

少年期を岐阜県の山中で過ごした。その地域一帯は美濃焼きの産地の一つで、中央線が走り、町中には煙突も立ち、窯業地らしい雰囲気が漂っていたのを憶えている。子供の頃の日で見たら、そこはもう都会地であり、月に数回山を下りて映画館や買い物にでも連れられていった。もうワクワクドキドキの世界であった。そんな地から5kmほど山合いに入った山挾が私にとっての棚田の原風景である。

そうした山間部であつたこともあって、水田耕作は谷合の狭い平地に、いわば猫の額ほどの水田があり、場によつては山裾と谷川を巧みに調和させた水田地が拡がっていた。“耕して天に到る”とまではいかないが、傾斜地の腹部は棚田となり、私もそこで刈入れ、田植えの手伝いをしたことがある。

一番上部の棚田は小さいもので、稻株20位の規模であつたろうか。面積にして約2m程度、今でもはつきり記憶しているのは田植えの最後がこの田で、家長がそれを執り行うことを習わしにしていた。田植えのめめくくりという意味を込めたものである。土地は全て生産基盤であるだけに、小量の収穫しか得られないような場であつても、それを大事にしていく家に伝わる行事のようなもので

あつたと、今にして思える。ほんの小さな棚田を維持していくことのほうが、収穫益よりはるかに四季折々の労力や維持管理を傾ける。これは一体何だろうかと考えるようになるのは、ずーっと後になつてからの思いである。

このことの重みは、収穫への努力の表れにあつたことは確かであるが、下の方にある良田を助けるのに大きな意味があることを知つた。祖父がよく言つていたのが今でも耳に残つてゐる。「上の小づくり田」はできるだけ水が温まるように滞水してやることが必要だと。

山の上では谷川の水をはるかに上流で、山を迂回させながら導水する以外は殆ど湧水に頼つてゐる。湧水は一年中温度が安定しているものの水温としては、とくに田植えの時期にはちよつと厳しいものがある。できれば稻の生育を助けるため冷水より適度な温水を求めるのは、その頃の百姓の生活の知恵であった。収穫量の少ない上の棚田を用いて水温の調整を行う、そんな役割を棚田の一部に課していた。たくましい農民の知恵といふべきであろう。

棚田は田植えの時期と刈り入れの時期では顔色が違う。前者は何か悲壮感が、たわわに実つた後者では明るさを汲み取ることが出来る。と言つても農村の生活感でいえば“棚田は勘弁”というのが実感であろう。あの急坂の上り下り、手間ばかりかかった割には収穫量の低さ、田としての維持管理への膨大な労力、全体に平地水田の何倍ものエネルギーを費やす必要があった。特に棚田の畦ぬりもさることながら、雑芝で固めたような土手では長雨による被害はしばしばである。棚田を与えられる後継者にとつては決して嬉しい話ではなかつたかと想像している。事実、棚田の上部は分家の、また二男三男への財産分けの場合が多かつたのは、本家の戦略でもあった。

棚田は今でこそ環境問題や文化的景観を尊重し、活用する社会的動向にしつかりと組み込まれてゐるが、少し視点を変えてみれば、いわば農村の苦行の部分と貧しさの部分をあぶり出していいるところがある。いまの棚田は明るい、どちらかといえば棚田を陽の文化遺産としてみる雰囲気を感じ取るが、これまで棚田を維持し構築してきた努力をみると、察するにそれほど余裕のある生活感を受け継いだ文化遺産とは言い難い。

棚田文化を愛する人達は、そうした農民の苦しみや悲しみを背景にして受け継いできた部分もあることを理解して欲しい。

特集

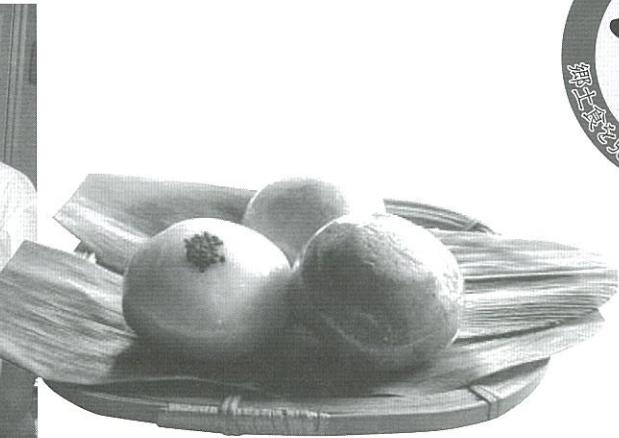
棚田・温故知新

温故知新とは、「ふるきをたずねて、新しきを知る」(論語)。昔の古いことを研究し、そこから新しい知識をひらいていくことを意味しています。今回の特集は、「棚田・温故知新」と銘打ち、全国各地でその地ならではの「古いもの」を再発見するなかで、「新しい」活動や活力につなげている事例を紹介します。古い知恵やかつての環境を取り戻し、今につなげていこうとする“現代の知恵”にも注目です。みなさんの地域の温故知新、見直してみませんか?



あんばー郷土食を掘り起しプロジェクト
がんばる母ちゃんたち＝新潟県十日町市・芝峰特産加工組合＝

十日町市観光交流課リゾート交流係 柳 裕子



それは、平成5年3月から始まった。旧松代町(現十日町市松代地区)の母ちゃんたち、30名が17回の研修会に参加しながら、松代町の郷土食「あんば」を特産品にする夢の事業がスタートした。

まつだい芝峰温泉の宿泊施設には、特産加工施設が併設された設計になっていた。当初の計画では「あんにんじょ」の製造を図指していたが、酒造免許を取得できず立ち往生していた。

そこで登場したのが、地元の母ちゃんたちである。料理自慢の母ちゃんたちは、あらん限りの知恵を絞り研究し試作を続けた。目標は、歯ごたえかなつこと、温泉客のお土産品になるサイズの「あんば」にすることだった。この条件に辿り着いたようやく誕生したのが、かあちゃん手づくりの「あんば」である。

「あんば」とは、その昔、宫廷で使われていた女房詞で「甘じるもの」という意味の「わら」を「アモ」と讀んでおり、遙かかなた旅をして、越後の国に辿り着いた時には「あんば」となった説がある。昔は米を精米した時ができる米の粉をこねて皮を作り、中の具は、油で炒めた味噌味の大根葉や、小豆の餡だつたりする。それを、囲炉裏で焼つたり、

灰の中で温めたりして食した。

たゞ、「あんば」が商品として販売される頃には、母ちゃんたちは4名になっていた。現在も少数精鋭4名の母ちゃんたちは、特産加工施設で、週4回の営業をしながらしている。

今、食の安心、安全が問われている。また「地産地消」も提唱され、スローフードとともに言れてくる「あんば」である。原材料魚沼産こしひかり100%の米粉、中の真材も地元産を使用してくる「あんば」は、まさしく消費者に求められてくる食品である。

また最近、「米粉」を使用した、パン、ケーキ、麺類などが話題になってしまるが、いのいとむ「あんば」には郷土風になってしまる。

芝峰温泉で、できたてはかほかの「あんば」が買える日は、温泉客の持ち帰り予約が絶えないことがない。母ちゃんたちの手作り作業の「あんば」ゆえ、あつとう間に売り切れ状態になる。そして、話上手の母ちゃんたちの「あんば」談義も、温泉客の購買意欲を誘つてしまふとも言つていい。

まずは、雪解けの季節にちょっと足を延ばして、まつだい芝峰温泉で美味しい「あんば」と露天風呂で癒されてみることをお勧めする。



歴史絵図から観る上勝町「樺原の棚田」

(有)環境とまちづくり

澤田俊明(徳島県上勝町)

1. 歴史的観点から棚田を観る

徳島県上勝町は、人口約2000人で四国では最も人口の少ない「町」である。現在の高齢化率は49%に達する。上勝町には、「横峯の棚田」「野尻の棚田」「府殿の棚田」

「中瀬津の棚田」「神田の棚田」「市宇の棚田」「八重地の棚田」「樺原の棚田」等と、多くの棚田が存在する。

このうち、「樺原の棚田」は平成11年に全国棚田百選に選定され、「八重地の棚田」は第8回棚田サミット(平成14)で曲線型耕場整備が紹介され平成20年末には「にほんの里100選」に選定された。

現在、「樺原の棚田」では、歴史・自然・生業に着目した「重要文化的景観の選定の申出の取り組み、「樺原地区・景観計画の策定」の上勝町による取り組みのほか、NPO法人「郷の元気」による「樺原の棚田石積み調査」などにより、「樺原の棚田」の多くの価値が明らかになってきた。

ここでは、この2~3年間に明らかになった歴史的観点からの「樺原の棚田」の新たな魅力を紹介したい。

●印は現在の施設位置です



樺原村分間絵図、「上勝町所蔵(本記事への掲載許可済み)」、文化10年(1813) (同絵図は表紙にカラーで掲載)

2. 300年以上前から 米どころだった樺原地区

『上勝町部落小史』によると、樺原村の起源は今から約380年前の江戸・寛永年間(1624~1643)との記述がある。約300年前の貞享1年(1684)の農業生産高を示す「反別・村高一覧」の記録から当時の各集落の耕作に関する土地利用状況が推察できる。記録によれば、福原村・野尻村・久保村・瀬津村・市宇村・八重地村では、「畑」の反別が多く、樺原村と田野々村のみが「田」の反別が多い。

樺原村では当時、水田44町歩(約44ha)、畑が25町歩(約25ha)作付けされている。樺原地区では、当時の周辺の村々と異なり、開村当初から畑よりも水田が主であり江戸時代より米どころであった。

この要因として、水田耕作に適する面積・土壤・水の樺原地区の自然条件が樺原地区にそろつていたことが挙げられる。樺原地区では江戸時代から水田耕作による棚田景観が卓越していた。

3. 今に残る200年前の 棚田実測絵図

江戸時代の後半、文化・文政年間(1803~1831)頃に、徳島藩では実測にも



徳島県上勝町 樺原の棚田

4. 絵図を観る、江戸時代に

樺原地区の文化的景観調査では、樺原地区の耕作地の変遷を、1813年樺原絵図、1876年地所明細図、1976年航空写真、2000年航空写真、との照合が行われた。その結果、①1813年樺原絵図と

(参考文献)

・上勝町教育委員会:樺原の棚田文化的景観保存調査、平成20年3月(平成21年度冊子印刷予定)

・NPO法人郷の元気:平成19年度農村景観・自然環境保全再生パイロット事業・徳島県上勝町「樺原の棚田」の景観保全活動のうち「樺原の棚田石積み調査」、平成20年2月

・かみかつ里山俱楽部:文化10年絵地図からみた里山景観・体験活動記録、平成20年8月

1813年地所明細図の間で農地分布の大きな変化がないこと、②1813年櫻原絵

図と1976年航空写真の間で農地分布の大きな変化がないこと、③1976年航空写真と2000年航空写真の間で農地面積が大きく減少していること、④現存する農地は1813年絵図と大きな変化がないこと、が報告されている。1970年代では、

櫻原地区の耕作範囲はほぼ江戸時代と同じ範囲が耕作されており、櫻原地区における農地は1813年間に減少したといえる。農地の減少は進んだものの、櫻原地区で多くの棚田は現在も耕作されており、現存する櫻原地区の水田・畑地の形状分布、里道の分布は、1813年絵図とほぼ同じであることが報告されている。つまり、「櫻原の棚田」を訪れるに少なくとも200年前の水田耕作の風景を直接体験できる。まさに、江戸時代への直接タイムスリップ体験が、「櫻原の棚田」では可能になる。

この実測の櫻原絵図を、平成18年に櫻原地区の棚田農家のみなさんと確認した。水田、畑、民家、里道などが描かれた絵図に、長い年月櫻原に生活する地元農家の眼が注がれる。櫻原に住む棚田農家のみなさんの眼そして記憶はするにかつた。

絵図に描かれた29戸のうち26戸の民家の持ち主の名前が次々と判明した。また、絵図に描かれている里道もほとんど現人も日常的に使用しているとのことであった。後日、里道についてには、櫻原地区農家のみなさんと現地を確認した。

❷ 絵図を歩く

平成20年には、かみかつ里山俱楽部(上勝町内の活動12団体で構成)の主催で、1813年櫻原絵図を読み、現地に里道を復元する櫻原絵図体験プログラムが2回にわたり実施された。これは、「実測分間絵図の読み方と特徴」「実測分間絵図からみた櫻原村の景観」「実測分間絵図と現在を比べる」「絵図をもとにした里山ウォーキングコースの紹介」「絵図の里道を現地で復元」のプログラムが紹介された。

櫻原絵図体験プログラム終了後その活動成果を元に、歴史地理学者・平井松午氏(徳島大学)の尽力により櫻原の棚田パンフレットが完成した。棚田パンフレットには、櫻原の棚田景観写真、櫻原地区の歴史、1813年櫻原絵図、櫻原散策マップ、棚田オーナー制などの情報が掲載されている。

❸ 守れるか！歴史資源としての棚田!!

櫻原の棚田は、四方を標高700～900m級の山々に囲まれ、隣接する集落とは峠道で結ばれる小宇宙的な空間として訪問者を迎える。櫻原の棚田の農地勾配は1/4と全国の棚田の中でも、最も厳しい地形条件にある棚田の一つであり、おのずと一枚一枚の棚田面積を小さくする。遊休農地を含めて786枚存在する櫻原の棚田1枚あたりの農地面積は、100m²(約1a)～200m²(約2a)の規模のものが最も多く、平均面積は約180m²(約1.8a)と小さい。櫻

原の棚田では、「畦の曲線」「畦の段」「田畠の小さな面積」が重要な景観構成要素といえる。

しかしながら、全国の棚田地域では、年を追いつぶとに棚田保全は益々困難になってしまい、過疎高齢化が急速に進展する棚田地域では、「急勾配」「小さな面積」は一層棚田の保全を難しくする。

このとき、江戸時代の実測絵図は、新たな力を棚田保全活動に与えてくれる。1813年櫻原絵図から山の暮らしを読みとり、現在の棚田と比較することにより、現在も引き継がれる棚田の文化や景観を知る。幸い絵図は旧徳島藩全域にわたり存在し、上勝町でも「櫻原の棚田」のほか「八重地の棚田」等の棚田についても実測絵図が残る。棚田保全の観点からも、1813年文化10年絵図の歴史的な価値は計り知れない。

原の棚田では、「畦の曲線」「畦の段」「田畠

の小さな面積」が重要な景観構成要素といえる。

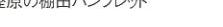
しかし、全国の棚田地域では、年

を追いつぶとに棚田保全は益々困難にな

る。



絵図の里道を現地で復元



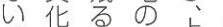
櫻原の棚田パンフレット



櫻原の棚田の保全(草刈り)



櫻原の棚田の保全(草刈り)



櫻原の棚田の保全(草刈り)



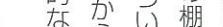
櫻原の棚田の保全(草刈り)



櫻原の棚田の保全(草刈り)



櫻原の棚田の保全(草刈り)



櫻原の棚田の保全(草刈り)



櫻原の棚田の保全(草刈り)



櫻原の棚田の保全(草刈り)



櫻原の棚田の保全(草刈り)



櫻原の棚田の保全(草刈り)



櫻原の棚田の保全(草刈り)





地域づくりの会議が温故知新

愛林館 館長 沢畑 亨(熊本県水俣市久木野)

棚田のある場所では地域づくり全体が

温故知新です。我が久木野地区の、他にはない良さとは、地理と歴史を学ぶことによつてしか知ることはできません。なぜに

「」には棚田があるのか、なぜ香り米が残つたのか、なぜ石垣があるのか……。答えは地理と歴史にあります。水田を當むに十分な水が谷を流れ(湧水も豊富)、低い気温と水温に対応した米を育て、どうぞ掘つても石ばかり、といった理由です。これらは、地区のお年寄りや詳しい人に聞きました。

ただし、お年寄りの知恵にも限界があります。なぜ「」には石ばかり出るのか? 久木野地区の最高峰大関山がその昔爆発し、熔岩で覆つてしまつたからです。田の中に巨岩が立ちてるのは、大昔の土石流の痕跡です。これは地質の専門家に聞いて初めて知りました。加藤清正が連れてきた石積み技術者が、細川家の入つて來た

ときに多数失業して藩内各地に散りばり、それから石垣棚田が増えた、ということも歴史の専門家に聞いて初めて知りました。

こうして得た知識と現状の棚田を材料として、愛林館ではよそから来たお客様を「」案内する「丸ごと生活博物館」(水俣市がある程度の条件を満たした地区を認定する)となっています。地域に長年住んでじる「生活学芸員」が自分の棚田を案内しますが、周辺さんの棚田、等さんの棚田は世界に一つしかないと感じました。お隣の棚田とは耕し方、土の作り方、栽培の仕方、水の入れ方など全部違うのです。これを淡々と説明するのですが、お客さんはなかなか好評です。

他に、伝統の技を学ぶ石垣積み教室もあります。土と石と自然素材だけで100年以上使える石垣を作り上げる作業は大変に面白いもの。造園業者の参加も

多く、ある程度の下地のある人には技術の伝承もできたのではないかでしょうか。愛林館では森づくりも行っていますが、ある程度の森ができるまでには10年はかかります。

それに比べ、石垣積みは一週間で完成です。ものづくりの楽しさと、か、風景の一部を自分の手で作り出す達成感は何とも言えません。

食の分野でも、交通不便な山村では昔から必要な物を自ら作り出していました。その技を活かして、そば・うどん・豆腐・こんにゃく教室も行っています。味噌や梅干しは昔ながらの味と香りのする商品を製造しています。

昔の技を学ぶと言つても、すべて昔に戻るわけではありません。石垣積みにはバッカローを使って土を掘り、石を吊り上げ、土の運搬にはトラックも使います。昔は田と木で擣いていたことにやく芋や、ミキサー

で粉砕するなど、合理化する手はしています。炭焼きでは、溝口秀士氏が開発した短時間方式(レンガで炭窯を作るのに15分、炭焼きは3時間)を採用するなど、現代の生活リズムに合わせた手法を取り入れています。

伝統にはなかつたけれど、美しい景色を活かしたいと思い、長崎県福島町に学んで「棚田のあかり」も始めました。竹・わら・バイオディーゼルといった自然素材のたまつを2000本置いて、棚田を火で飾るのです。過去に4回行い、人気行事として定着しました。

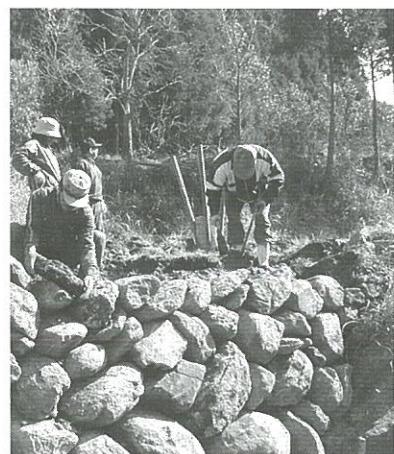
このように、現代に生かせる伝統は無限にあります。樂しいもの、美しいもの、美味しいもの、ちょっとしたもの(ただただ耕作断念田の草を刈る田助手といつ合宿もあります)、いろいろな入り口を揃えて、今後も棚田への関心を深めていくつもりです。今後は、ボランティアの仲間と一緒に、地域の労働力の一翼を担う組織を作りたいと考えてもらっています。また、環境上の機能に対してもお金を支払う直接所得補償の制度を作りたどり、この参加者には訴え続けたいと考へています。



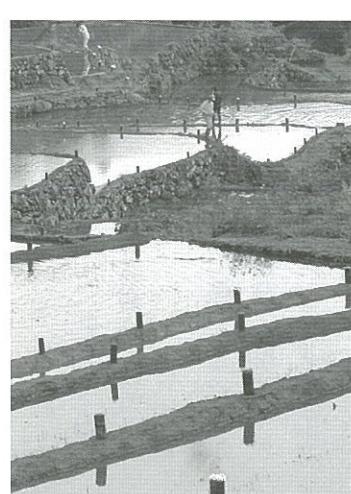
「家庭料理大集合」。郷土料理を持ち寄って味見



「うどん教室」。うどんをこねる。そばも同様



「石垣積み教室」。地元のベテランが先生



「棚田のあかり」。5月中旬、田植え直前



トキと共に生きる環境を取り戻す

NPO法人 トキの島 事務局長 中島 明夫(新潟県佐渡市)

佐渡市では今、放鳥トキとの共生、佐渡金山の世界遺産登録を目指して、農地や森林の整備の取り組みが始まっています。佐渡金山と農業の関係は、江戸時代の佐渡金山開発により増えた人口を養うため

に棚田開発が行われた経緯があり、その象徴として小倉千枚田の復元・活用が行われています。放鳥トキとの共生においては、田んぼを餌場として位置づけ、5割減減の環境保全型農業、ビオトープ整備、生き物を育む農法などが展開されています。

これらの取り組みは、佐渡市や新潟県などの環境整備助成、棚田オーナー制度、ブランデー米の構築などの支援プログラムが展開され、また環境整備においては大学のゼミ合宿、NPO法人の交流プログラムなどが大きな支援となっています。

米の販売については、農協によるブランド米を大手スーパーへ流通し、各

生産者グループにおいても産直や生協グループとの取引が始まっています。経済的な付加価値にもなりつつあります。

2008年9月25日 10羽のトキ

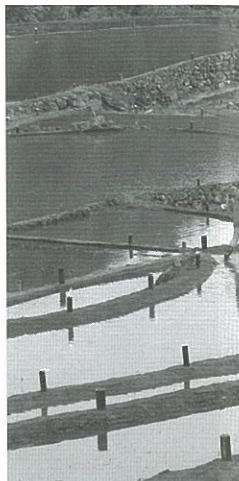
トキは現在、佐渡に5羽、本土に3羽、行方不明1羽、死亡1羽となっています。

が放鳥され、死亡・行方不明・島外移動などにより現在5羽が佐渡に生息しています。

佐渡にいるトキの大半は平場で活動していますが、一時期棚田地域にも現れています。トキの探餌場所は稻刈り後の田んぼ、畠畔、水路などで、昔ながらの圃場、古いタイプの

圃場整備の田んぼで、ジヨウ、カエル、イモリ、昆虫類、ミミズなどを採餌しています。大型機械が入らない沢沿いの田や、急傾斜の田など島内においても手間のかかる農業を行っている農地にトキが現れています。トキが来たことに喜びを感じている反面、農繁期に入り、農作業に負荷(飛来している間、作業を中止したり等)がかかるのではないかといふ意見もあります。

今後、トキとの共生、世界遺産登録というストーリーを島民一丸となり、島外の方も含め情報を共有し、一緒になって、どう取り組みをしていくかが、再生の大きな課題です。



トキの餌場となるビオトープをつくるボランティアの方たち。写真左は、硬くなった土の掘り起こし作業。写真右は、畦の草刈り

※5割減減とは、農薬と化学肥料をそれぞれ5割以下に減らすこと



四十八枚田とともに

II 四十八枚田保存会

千曲市教育委員会 矢島 宏雄

しじゅうはまいだ

長野県千曲市にある名勝「姨捨(田毎の月)」は、棚田を中心とした姪石地区、長樂寺を中心とした長樂寺地区と四十八枚田地区から構成され、平成11年に文化財指定を受けています。

四十八枚田は、西行法師の阿弥陀仏四十八願にちなんだ名づけられたと伝えられています。付近の棚田が圃場整備された時に、この部分だけ現状で保存されてきました。現在約20a、37枚の大小の水田があり、「田毎觀音」の石仏が畦にポツンと置かれています。

平成12年3月に策定された『名勝「姨捨

(田毎の月)』保存管理計画において、四十八枚田地区は「伝統的形態保全を行なう地区」として、従来の農法を継承することを原則とする、姨捨の名勝指定地の中でも一番厳しい規制がかけられています。畦畔の形状変更は不可、田越しかんがいの継続、從来農法の継承などです。将来的には、昔ながらの畦塗りなども復活できればと計画されています。

また、明治26年に製作された地籍図には、48枚の田んぼが表現されており、この区画についても、かつてのように48枚の区画に復田できればと構想されています。

「四十八枚田保存会(会長 宮坂信勝さ

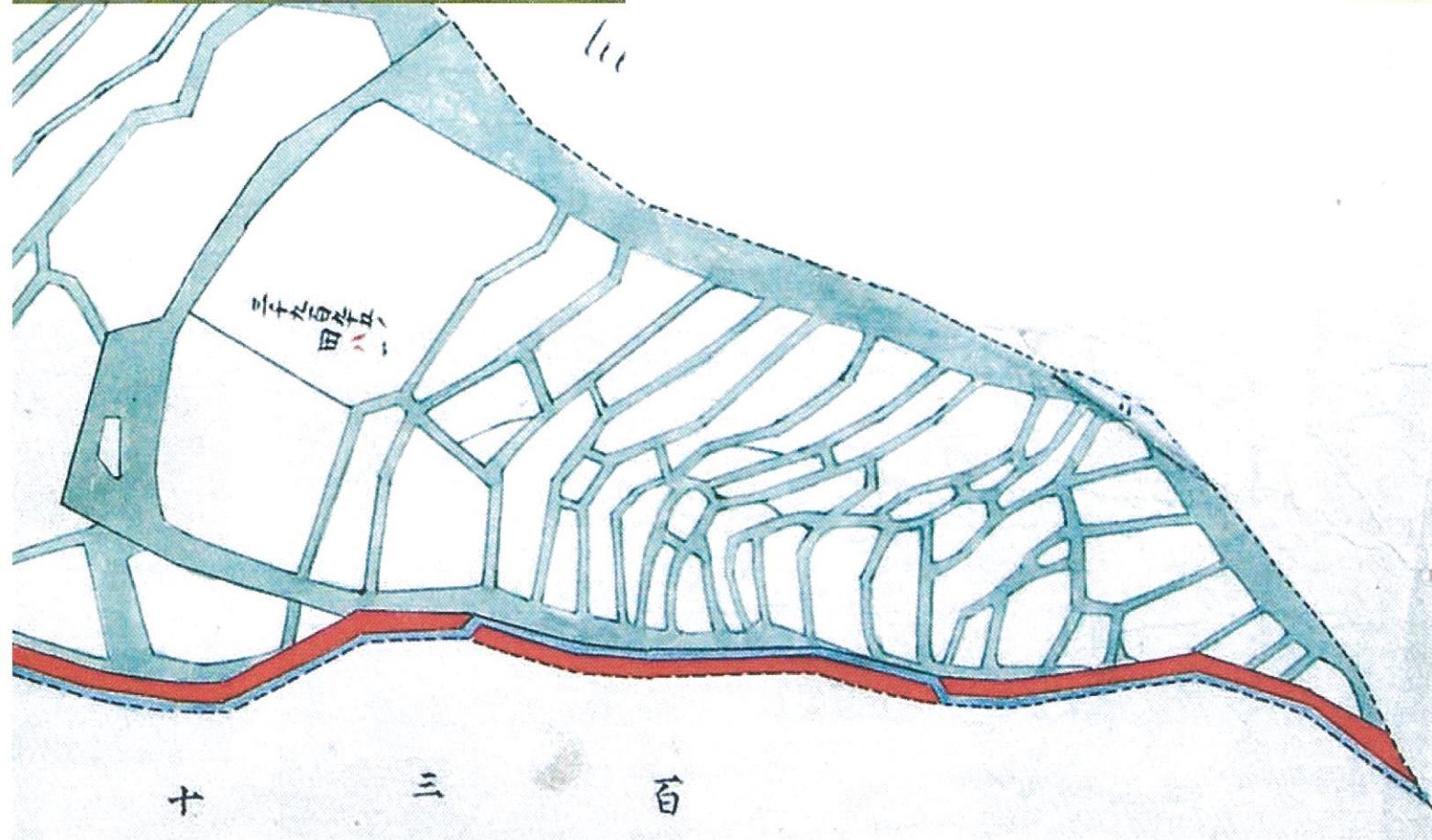
ん)」は、平成7年長樂寺ご住職が病氣のため、寺所有の四十八枚田の耕作が困難になつたことを契機に、地元姨捨地区の農家12名により保存会が作られ、四十八枚田の耕作を始めたものです。

平成8年度からは、オーナー制(48組限定)を取り入れ、広く姨捨棚田の周知を図り、また都市住民との交流活動も始めました。保存会では、年会費1万円でお米10kgとお餅をオーナーに送り、仲秋の名月の前後にオーナーを交えて長樂寺でお月見会を開催し、お酒にカラオケもあり、みんなで楽しいひと時を過ごしています。



左：宝永3年(1706)銘の田毎觀音

下：明治26年地籍図(大字八幡字月見田)





黒鍬からゾーングの整備まで

NPO法人恵那市坂折棚田保存会理事 河合 哲玄

恵那市坂折棚田は、石積み棚田として全国の棚田愛好家に親しまれています。この石積みは、田ごしりえをする時に出土した石を積みながら田ごしりにしたもので、約400年の歴史を持ちます。

積み方の技法については「石積みの棚田」(市教委発行)に委ねるもの、その中で「際目立つのが「黒鍬衆」の技術集団による工法です。」の石垣は江戸末期に当地方に入った技術職人で、地主の財力で「田直し」をしつつ積まれたものです。その技法は地域の人々に受け継がれ今まで定着しています。

(市教委発行)に委ねるもの、その中で一
際目立つのが「黒鍬衆」の技術集団による
工法です。この石垣は江戸末期に当方方に
入った技術職人で、地主の財力で「田直し」
をしつつ積まれたものです。その技法は地
域の人々に受け継がれ今日まで定着してい
ます。

ため、平成9～10年度にかけて京都大学金田教授の指導を受け、水田現況や歴史・民俗資料の調査を市教委が実施しました。また信州大学木村教授の指導で棚田の荒廃化とその対応策も検討されました。このような時、平成10年度に創設された

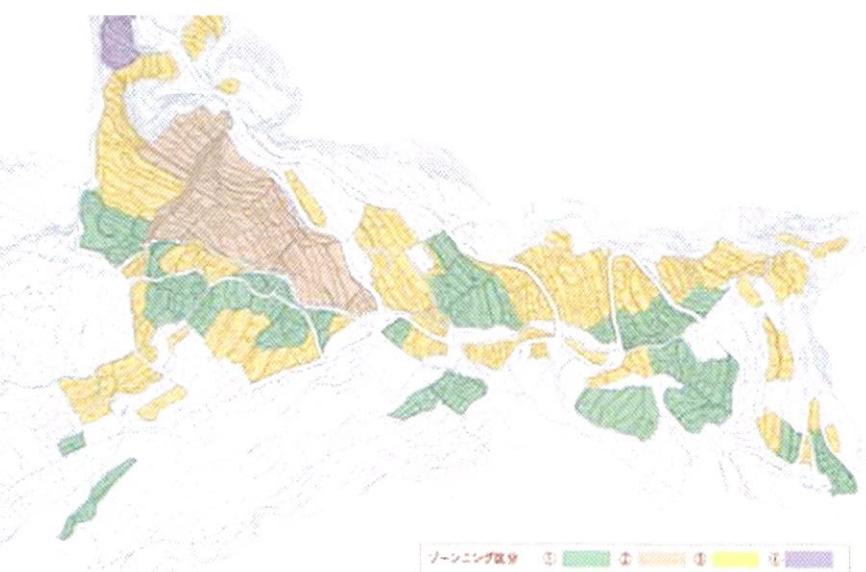
1. フィルムの整備を行い、機器を図るエリア
2. 石積み棚田を残し、農業用の整備・保全のゾーン

2. 石積み棚田を残し、農道等を整備し、
農の持続を図るトリア
3. 当面は現状のままで、畠農を持続するト
リア

ア 4. 植林等農業以外の土地利用を図るエリ

このような状況の中、當農の持続を図つてこまわが、今日的課題は全国の棚田地区の涵みと共通してこまわ。

高齢化、後継者不足にはオーナー制度の拡充で、鳥獣害には中山間直払い電牧を設置し、石垣の自然崩落には「石積み塾」で補完しながら、黒鍬が築き上げた「坂折棚田」の素晴らしい景観を残すため、ゾーンづけのエリアごとに保全活動に取り組んでいます。



写真上は、棚田ゾーニング図。
航空写真は、整備後の坂折棚田



の整備まで
折棚田保存会 理事 河合 哲玄

棚田地域等緊急保全対策事業での整備を望む農家もでてきました。そこで、平成11年6月に地区全体の実施設計の整備保全の具体策を検討するため、学識経験者早稻田大学中島教授を委員長に、地元農家・自治会・学識経験者からなる「恵那市坂折地区の棚田に関する整備・保全構想検討委員会」を設置し検討されました。

当地区で農用地総合整備事業が持ち上がり、区画整理説明会が開催されたのは平成6年のことでした。

年6月に地区全体の実施設計の整備保全の具体策を検討するため、学識経験者早稻田大学中島教授を委員長に、地元農家自治会学識経験者からなる「恵那市坂折地区の棚田に関する整備保全構想検討委員会」を設置し検討されました。

平成の中国

平成2年3月「憲那市版」

中華書局影印

平成2年3月「懲那市反応地」の棚田



雪を生かす知恵を現代に

(財)雪だるま財団 チーフスノーマン・工学博士 伊藤 親臣(新潟県上越市)

雪とのつきあい

新潟県旧安塚町(現上越市安塚区)は、かつて陸の孤島ともいわれた豪雪地域であり、積雪深が5mを超える集落がいくつもありました。ただ、近年、暖冬の影響で少しあり

少雪傾向ではありますが、自然は雄大だという事を実感する日も少なくはありません。また、春になると雪溶けがもたらす豊富な水は、四方を山に囲まれた中山間地の棚田を潤し、この地に暮らす私たちの命を支えてきました。

旧安塚町において大きな転換期を迎えたのは昭和61年のこと。冬に都市部から訪れる観光客の「この雪を持って帰りたい」という何気ない一声がきっかけとなり、日本で初めて雪を商品化した「雪の宅配便」が大ヒットしたからでした。

当時、私たちにどうぞ雪に対する認識は「じやまわの」でしかなかったのですが、雪が珍しいとと思う方にとって魅力的な物であり「貴重な物」であることを知りました。

それから20数年。「雪」を「資源」として捉え、平成元年に掲げた「雪国文化村基本構想」を実践しつつ、安塚らしくまちづくりを進めてきました。現在では冬に降った雪を夏まで貯蔵し、「雪」を冷熱エネルギーとして積極的に活用しています。樽田の雪室、雪だるま物産館、そして安塚小・中学校や事務所など、安塚区内に14施設、上越市内全体では16施設にまで普及しており、国内でも例を見ない導入実績です。

雪の利用

冷凍技術が発達していない頃、雪は貴重な資源でした。雪国では古くから雪の中に野菜を保存する文化があり、昭和20年頃までは実際に雪山を「ワラやカヤ等で囲う「雪室」として農産物の貯蔵や海産物の鮮度保持に利用していました。夏の雪はものを冷やすだけではなく、甘い蜜をかけて食用にしたり、怪我や病人の治療に用いられたりしました。

また、雪を夏まで蓄えるには大量に雪を集めが必要があり、パワーショベルなどの大型の土木機械がない時代には多くの人足を要しましたが、雪を集める仕事は冬場の農民にとって貴重な収入源にもなっていました。しかし文明が進み、電気冷蔵庫が普及し、加えて、過疎化に伴う人口の減少が雪山の造成に必要な人力を奪い、「雪室」の文化は衰退してしまいました。安塚区行野集落に「雪室跡」が残っており、現在は集落の夏の行事に機能復元しています。

また、雪国では野菜が少ない冬を鮮度良く保存する知恵を経験的に培つきました。簡易にワフと材木で作った家庭版の冷蔵庫「こお」は手軽な雪室として利用されてき



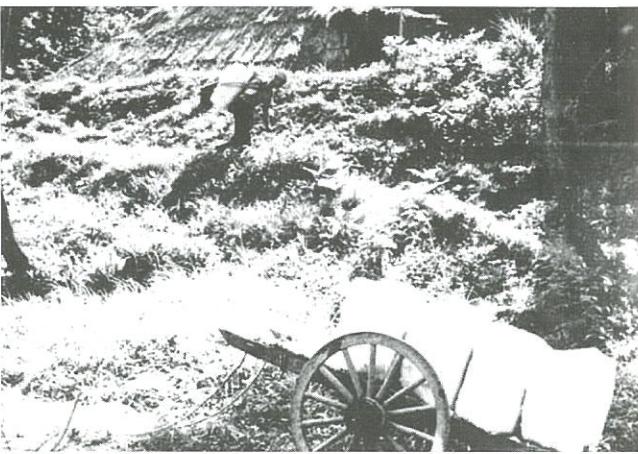
現代の雪室のなかで保存される棚田米

「こお」は手軽な雪室として利用されています。雪室は全国に先駆けて実践しています。冬に降った雪はエネルギー的な価値は低いのですが、夏になるにしたがって、エネルギー的な価値は高まります。自然に降った雪を冷房に利用する事は、環境に優しいエネルギー利用であると考えます。また、雪冷房の特徴は空気を冷やすだけでなく、一定の温度を保つことです。空気中の「CO₂」などを雪で吸着する空気清浄効果も期待でき、洞爺湖サミットでも利用され注目を集めています。

樽田集落にある現代の雪室。写真人物は、スノーマンこと伊藤氏



十日町市博物館蔵。かつて雪室から切り出された
雪は保冷用等に売られた



自然エネルギーから生まれた電力は環境負荷を与えない「グリーン電力」が制度化されています。近い将来、その熱源版である「グリーン熱」の導入が検討されます。これは、環境に優しい熱源に対して認証機関が証書を発行して普及を広めようとして動きです。つまり、雪国の雪がエネルギー証書として認められれば、地球温暖化防止に寄与するというものです。端的に表現すると遂に「雪がお金になる時代」がすぐそこまで来ているのかかもしれません。そして、国や企業の「酸化炭素の排出権

取引が活発化されれば、純国産の資源である雪が、毎年、雪雪(せつせつ)とタダで降ってくる様は、なんだか頬もしくも思えます。



雪国これから

神様と棚田と生きる

日本民俗学会会員 渡辺 一弘



天孫降臨の地、神話のふるさと、高千穂郷。その一隅にあたる日之影町。日之影とう言葉は、日陰の意味ではなく、雲間から神々しく差しこむ光の筋を日之影といつ。台地状の高千穂町と比べ、日之影町は、平地が少なく、川に面した斜面に集落が点在する。

高千穂町から日之影町を通り日向灘へと流れ込む五ヶ瀬川の支流、日之影川の上流約8kmの右岸に、棚田で有名な日之影町の「石垣の村 戸川集落」がある。近くには、縄文時代後期といわれる新畠洞穴や大溜遺跡などがあり、古くからこの急斜面の土

地に人々が暮らし、狩猟や採集を中心的に、焼畑が行われていたことがうかがわれ、昭和の初期まで焼畑は盛んに行われ、小規模ではあるが最近まで焼畑が行われていた。雑穀作から米作への移行は長年の人々の夢であったのだろう。

日之影川から水を引く、総延長36kmにも及ぶ大規模な七折用水の工事が、大正の年に始まり、14年に完成。この用水により、山を拓き、各地に田を作ることができるようになった。戸川集落の棚田も七折用水の開通時には完成し、石垣の村は、大正末期にはほぼ現在の形となつた。戸川集落の裏山

写真提供:日之影町



にも水田があるが、この水田面積よりも広い棚田を作ったのは、当時の人々の米作への願望とともに、石垣築造の技術があつたからに他ならない。

現在見られる石垣築造の記録はほとんどなく、古老人の口伝では、一番古い石垣は嘉永から安政年間に坂本寅太郎と藤本嘉三郎の2名の石工によつて築かれたといつ。両名は安政2年の大地震で崩れた江戸城の石垣修復工事に、石工技術を見込まれて

従事し、帰郷してその技術をもとに石垣を築いたといわれてゐる。当時、の丘の村で、ただの石垣を作る」とができるのは、こうした技術だけではなく、人々的好奇心だけが伝えられている。こうした神話と伝説が伝えられている。

この「石垣の村」を見下ろすようにそびえる山川岳（標高約450m）は、古くから山岳信仰の靈場であったとされ、絶壁の洞穴には五百羅漢が祀られてゐる。さらに山川岳には藤密坊、丹助岳には丹祖坊、城の

岳には早鷹中央坊といつ天狗がいて、色々と秘法秘術を伝授されていたとか、また工藤嘉治平といつ劍の達人が修行した話などが伝えられている。こうした神話と伝説に彩られた戸川集落は、現在、戸の人々たのかも知れない。

山岳信仰の靈場でありたとされ、絶壁の洞穴には五百羅漢が祀られてゐる。さらに山川岳には藤密坊、丹助岳には丹祖坊、城の

岳には早鷹中央坊といつ天狗がいて、色々と秘法秘術を伝授されていたとか、また工藤嘉治平といつ劍の達人が修行した話などが伝えられている。こうした神話と伝説に彩られた戸川集落は、現在、戸の人々たのかも知れない。

山岳信仰の靈場でありたとされ、絶壁の洞穴には五百羅漢が祀られてゐる。さらに山川岳には藤密坊、丹助岳には丹祖坊、城の

特別寄稿

棚田から読み解く歴史——棚田を城郭として活用した楠木正成——

棚田学会副会長・早稲田大学文学学術院教授 海老澤 衆

棚田学会は、現代における棚田の多面的な機能を明らかにして、地域の活性化に貢献してきた。このように棚田の歴史を考え、現代では失われてしまつた機能を考えてみたい。最近の研究で、「棚田」といふ言葉が明確に使われるようになつたのは、一〇三〇（建武5）年からであることがわかつた。「鎌倉遺文」といふ、鎌倉時代の文

書を網羅的に集めた史料集の中には存在しないので、「棚田」は南北朝時代に発生したものといひ難い。鎌倉時代以前にも実態としての棚田は存在したが、それらは一般的に「山田」といふ言葉の中に含まれるものであった。この「山田」について『太平記』の第3巻には次のよつた面白の記述がある。

ある。楠木正成の館の近くにあり、急いでいるのが城郭であったが、熱湯掛けの奇策によって幕府軍をさんざんに目に逢わせ、やがて千早城に籠もつて鎌倉幕府を滅亡へと導くのである。

この赤坂城は大阪府千早赤阪村内の丘陵上にあつて、国指定の「史跡赤坂城跡」として戦前から保存がはかられてきた。周辺は「棚田百選」に選定された「下赤阪の棚田」で、棚田での芸術祭なども行われ、都市化の著しいなかで保全されている貴重な事例となつてゐる。今まであまり注目されることはなかつたが、史跡赤坂城の東斜面には、写真のように斜面の切り盛りがわずかで、畦畔が幾重にも重なつて、地図の等高線のようになった棚田が存在してゐる。さらに興味深いことには、この棚田に掛かる用水は一〇〇〇m以上離れた千早川の谷水を延々と水路で引き、尾根上に到達させて

彼赤坂ノ城ト申スハ、東一方「ソ山田ノ畔重々」高シテ、少シ難所ノ様ナレ、三方ハ皆平地ニ続キタルフ、堀一重ニ屏ニ重塗タレバ、如何ナル鬼神力籠リタリ共、何程ノ事力可有ト寄手皆是ヲ侮リ、

赤坂城の東側面は、棚田が累々と重なつて比高差があり、攻める」とは少し難しいが、他の三方は平地に続いていて、簡単な防御施設しかないので、困難はないというのである。この「赤坂城」こそ楠木正成が鎌倉幕府打倒のために最初に立て籠もつた城

配水したものである。他に灌漑の方法はなく、楠木正成の時代にはこの水路が完成しており、その棚田に用水を供給したものであつて、從来、棚田は農民たちが税からの逃れるために谷間にじつそりと作る「隠田」であったという考え方があつたが、史跡赤坂城の東斜面の棚田は鎌倉時代の領主が大規模な水路工事を行って築造し、城郭としても活用したものであつた。当時の棚田の活用は、現在のわれわれの想像力を遙かに超えるものであつたといえよう。

棚田学会は本年7月には10周年を迎えることとなつてゐる。今まであまり注目されることはなかつたが、史跡赤坂城の東斜面その記念誌が刊行される。この冊子には千葉県の大山千枚田の来歴や佐渡・岐阜に残る車田の価値を明らかにした論文も掲載される。歴史的分野からの解説も確實に進展した10年であつたといつてよい。これからも地域の活性化に向けて一層の努力をし



史跡赤坂城東斜面の棚田

坂折棚田保存会(岐阜県恵那市)がNPO法人を取得

NPO法人恵那市坂折棚田保存会 理事長 田 口 讓

るかありました。

この坂折棚田は、岐阜県恵那市の北部中野方町に位置し、およそ400年の歴史を持つ石積みの美しい棚田です。

最初は、田を造るときに出土した石を無造作に積み上げたものと思われますが、江戸末期から明治にかけて、黒鍬と呼ばれる石工職人の技術によって現存する石積みの棚田になっています。

当保存会の前は坂折棚田保存会で、平成11年に日本の棚田百選の認定を受けたことや平成15年に当地域で開催された第9回全国棚田(千枚田)サミットを開催に発足し、棚田保全活動を行ってきました。

この保存会の活動を継承し、新たな棚田保全組織として平成18年7月に『恵那市坂折棚田保存会』が発足し、市内を中心として周辺地域から会員を募り現在約100人の会員で運営しています。

当面は「棚田オーナー制度」の拡充、美しい石積み棚田の補修を兼ねた「石積み塾」の開催、当地域に伝わる年中行事(田の神祭り、収穫祭等)のイベント化、

交流や情報交換も棚田ネットワークを通じて進め、相互に協力して日本の原風景としての

「棚田」を広く国民の皆さんに知らせると共に支援を賜りたい

「棚田」の学術的研究を目的とし、かつ、学術研究者だけの組織ではなく、広く「棚田」に関心のある人たちの参加を得て、研究の成果が現実的な「棚田」保全に結びつくようにしたいと考えている会です。

会長：中島峰広

(早稲田大学名誉教授)

副会長：石塚克彦

(劇団ふるごときやうばん脚本演出家)

海老澤 表
(早稲田大学文学学術院教授)

年会費／普通会員4千円・学生会員2千円・賛助会員10万円(法人会員3口以上)

申し込み問い合わせ先

【事務局】〒184-18577

東京都小金井市本町6-15-3ふるさときやうばん内

T E L : 042-381-6721

F A X : 042-383-8614

紹介します

棚田学会

棚田学会は、「棚田」の歴史やそれを取り巻く民俗、地理的環境とそれに対する人々の工夫や技術などの実態

を明らかにし、生態学や経済学、農業土木学や農政学など成果を合わせて、「棚田」の現代的意義の解明と「棚田」の継承に向けて各方面の英知と熱意が高まる場として、1999年8月に発足しました。

「棚田」の学術的研究を目的とし、かつ、学術研究者だけの組織ではなく、

広く「棚田」に関心のある人たちの参

加を得て、研究の成果が現実的な「棚田」保全に結びつくようにしたいと考

えている会です。

当保存会の前は坂折棚田保存会で、平成11年に日本の棚田百選の認定を受けたことや平成15年に当地域で開催された第9回全国棚田(千枚田)サミットを開催に発足し、棚田保全活動を行ってきました。

この保存会の活動を継承し、

新たな棚田保全組織として平

成18年7月に『恵那市坂折棚田

保存会』が発足し、市内を中心

として周辺地域から会員を募り現在約100人の会員で運営しています。

【NPO法人として認証される】

坂折棚田保存会という任意団体で活動している中、壁になつたのが経済的な課題です。即ち活動資金をどう調達す



新しく自治体会員が増えました

全国棚田(千枚田)連絡協議会の自治体会員は現在57市町村です。棚田の保全利活用、また中山間地域の活性化を目指しています。

栃木県那須烏山市——小木須地区 国見の棚田

国見地区は、那須烏山市を縦断する清流那珂川の東側に位置する茨城県との境に連なる八溝山系の一角に位置し、県都宇都宮市から約40kmの位置にあり、那須烏山市街からは約8kmほど離れた中山間地域の風光明媚なところです。

国見の棚田は、面積2.2haと狭い中で50枚の水田で形成され、日本の棚田百選に選ばれた後、平成12年に中山間地域直接支払交付金制度の知事特認地域として指定を受け、農道や水路の管理を組合員の共同作業を中心に行い、棚田の保全に努めています。

当国見地区の特徴は棚田を見下ろす位置から見上げる位置まで農道があり、自動車でも移動しながら棚田の上段・中段・下段からの景観が楽しめるところです。

当地域では、平成16年から「ちぎ夢大地応援団活動事業(栃木県栃木県農業振興公社)」に取り組み、毎年30~40人のボランティアの方々を県内外から受け入れし、棚田周辺の環境美化の作業(草刈等)を行っていただき、毎年爽やかな汗を流していた

だいたおり、棚田周辺の環境美化に大きな力を頑張っています。

作業後は、地元自治会員と棚田保全組合員により「すいとん」の賄いをし、参加者の方々との楽しい交流を行っております。

また、平成18年度には棚田ネットワーク代表の中島峰広先



生の紹介によりアストラゼンカーミングの社員の方々40人のボランティアも受け入れ、都会に住む企業職員の方々には慣れない草刈などを行つていただき、中山間の谷間に20代の若い男女の楽しい笑い声が響きわたる中、作業中の後ろ姿を見ながら地元の高齢者もワクワク・ニコニコ笑みをこぼしております。

さらに、作業後は日本最北端と云われる「国見の観光みかん園」で、楽しいみかん狩りを体験し、地元みかん組合員の貴重な昔話を聞きながら有意義な交流も行つております。

観光みかん園は10月下旬から12月中旬まで開園し毎年多くのみかん狩り客が訪れ賑わいます。

◆

● 日…2009年7月1日(土)
◆ 会場…三越劇場(東京日本橋三越本店)

■ 石井進記念棚田学会賞授賞式
(13時~14時)

■ シンポジウム「里山と棚田を守る—歴史・論理・実践—」
(14時30分~17時50分)

○ 講演2「棚田という風土について」内山節(哲学者)

○ 講演3「自然学校によって里山と保全」水野章二(滋賀県立大学教授)

○ 講演2「棚田」という風土について」内山節(哲学者)
○ 講演3「自然学校によって里山と保全」水野章二(滋賀県立大学教授)
アース自然学校代表)

これら多くのボランティアの

方々の協力を得て今後も美しい棚田の保全に努め、「鯉のぼりと泳ぐ鯉のぼり」を設置し、市内外から見物客が訪れる賑わいを見せております。

これら多くのボランティアの方々の協力を得て今後も美しい棚田の保全に努め、「鯉のぼりと泳ぐ鯉のぼり」を設置し、市内外から見物客が訪れる賑わいを見せております。

(農政課 堀江豊水)

■ パネルディスカッション
司会…海老澤 裕(棚田学会副会長)/早稲田大学文学学術院教授
会事務局(ふるさとさやらばん内)
TEL:042-381-6721

◎ 情報 ◎

棚田学会が毎年恒例のシンポジウムを開催する。テーマは、「里山と棚田を守る—歴史・論理・実践」。

今年1月、朝日新聞が多くの棚田地域を含む「日本の里100選」を発表し、新たな問題提起を行つたが、保全には様々な課題があり、未だ十分な解答を得ていな。今回はこの方面で活躍中の3名による講演とパネルディスカッションを行い、里山と棚田を守る指針・方策を明らかにする。

第15回全国棚田(千枚田)サミット<in新潟県十日町市>ニュース

○日時:平成21年10月16日(金)~10月17日(土)

○テーマ:未来へつなげ美しい郷土を ~ 棚田からのメッセージ ~

○開催会場:松代総合体育館(十日町市松代)、

十日町地域地場産業振興センター(十日町市 宇都宮)ほか

<1日目 10月16日(金)の主立った内容予定>

○基調講演:富山大学 教授 酒井富夫氏

○棚田見学会:星崎の棚田(松代地域)／儀明・蒲生の棚田(松代地域)／新田の棚田(松之山地域)
／留守原の棚田(松之山地域)

○全体交流会

<2日目 10月17日(土)の主立った内容予定>

○分科会:第1分科会~第5分科会を開催予定。首長会議を同時開催

○事例発表 ○分科会のまとめ

問い合わせ:第15回全国棚田(千枚田)サミット実行委員会 事務局(十日町市松代支所地域振興課内)

〒942-1592 新潟県十日町市松代3252番地1

TEL:025-597-2220 FAX:025-597-2526

事務局 ニュース

事務局、栃木県茂木町
からのお知らせコーナー
一です。

現在、第16回の静岡県松崎町、第19回和歌山県有田川町でのサミット開催地が決定しています。今回の理事会では、新たに第17回開催地として徳島県上勝町から開催の請願書が提出され、理事会で開催地として承認されました。既に上勝町では、3月に実行委員会を立ち上げられる予定とのことで、早くも着々と準備を進めているようです。

2月9日、東京八重洲ホールで第2回理事会を開催しました。第14回雲仙市長崎市サミット開催報告の後、次回10月16日~17日に新潟県十日町市で開催される第15回サミットの開催概要の説明があり、開催テーマに「未来へつなげ美しい郷土を~棚田からのメッセージ~」が発表されました。

さて、1年間事務局を担当させて頂きました。棚田連絡協議会をする一員として、協議会運営をして参りました。ホームページの更新、サミット次期開催地のPR、会員からの情報提供の発信など小さな事から取り組んできました。会員の少ない北関東の片隅で頑張ってきたつもりですが、会員同士のネットワークには程遠いと感じたのも事実です。活動してはじめて、存在感をアピールできるものであり、動いている姿があればこそ、必ず共感してくれる仲間がいるはずです。事務局から少しでも発信することで、全国各地のみなさんが元気になるのではないかと信じています。

また、第18回の開催地及びその後の開催地については、サミット開催地選定委員会の中心的役割を果たしておられる中島峰広氏のご尽力により、全国各地で活発に協議が進んでおります。今後もサミットが絶えることないよう開催請願書の提出があることを期待しています。

もうすぐ、事務局は雲仙市へと引き継がれていきますが、活動の発化と会員の獲得を第一の課題として継承していきますので、今後とも当協議会をよろしくお願い致します。

棚田の保全・中山間地域活性化のための全国組織

全国棚田(千枚田)連絡協議会

お申し込み・お問い合わせは協議会事務局

茂木町役場 農林課農業振興係

〒321-3598 栃木県芳賀郡茂木町大字茂木155

TEL: 0285・63・5634

FAX: 0285・63・5600

協議会 HP:<http://www.yukidaruma.or.jp/tanada/>

編集後記

年3回という限られた発行のライステラスとして、毎号、特集テーマに力を置いて、焦点をしぼった情報提供や会員のみなさんの情報交換ができるよう努めています。今回は、徳島県上勝町でめずらしい江戸時代の絵図が残っており、それをもとに地域のみなさんが活動をはじめたことに触発を受け、古きものを掘り起こし、新しいものへつなげていく活動の魅力を紹介しました。こうした情報をまだまだ編集部では集めきれていません。「うちにもこんな活動があるよ」「こんな絵図や写真があり、これをライステラスで取り上げて欲しい」など情報をお寄せ下さい。記事に取り上げていきたいと思います。カラーページもありますので、みなさんにカラーで提供できることをうれしく思っています。 石井里津子

新しく会員になったみなさま

<個人賛助会員>

関 健児(うきは夢醉塾)(福岡県うきは市)

*前号で、うきは夢醉塾を団体会員入会として紹介しましたが、個人賛助会員の誤りでした。お詫び申し上げます。



棚田ギャラリー
棚田を撮ろう

棚田学会には、写真・絵画等好きのメンバーが集まって活動する(写真部)「じょんのび会」(“じょんのび”とは、のんびりという新潟の方言)があります。メンバーは、それぞれが全国棚田(千枚田)連絡協議会の個人会員や個人賛助会員でもあり、協議会やサミットを支えています。今回は、そのメンバーから棚田写真のメッセージが届きました。

左上:日向の棚田(長崎県東彼杵郡川棚町木場) 撮影:安井一臣

右上:千枚田(高知県高岡郡梼原町神在居) 撮影:中村由信

中央:星峠の棚田(新潟県十日町市峰) 撮影:永田博義

左下:泉谷(愛媛県喜多郡内子町北表) 撮影:今井英輔

右下:西ヶ丘(兵庫県美方郡香美町村岡区) 撮影:森公夫

